災害時における
障害のある方の現状を知り
私たちに何ができるかを
一緒に考えてみましょう！

【発　行】特定非営利活動法人 **明石障がい者地域生活ケアネットワーク**（略称:135Eネット）
【連絡先】〒673-0883 明石市中崎1丁目5番1号 時のわらし内 **TEL&FAX 078-918-8500** 【発行日】2021年11月1日

特定非営利活動法人明石障がい者地域生活ケアネットワーク（略称135Eネット）は、地域に点在する社会資源を有機的に繋ぐと共に明石市等の行政機関と協同し、障がい者に対して社会参画促進や生活支援に関する事業を行い、障がいのある方やその家族の方が、ひいては明石で暮らす市民の方々が明石の地で安心して暮らせるまちづくりに寄与することを目的としています。
※現在明石市及び周辺地域の100以上の障がい児者支援事業所や教育機関、当事者団体が連携・連帯のもと活動しています。

<ひなたぼっこHP>
https://akashi-ud.info/

あかしユニバーサル情報誌
ひなたぼっこ

災害時における障害のある方の現状

耳の不自由な方
アツミさん

車椅子ユーザー
ヨシオさん

それぞれの立場を考え、
思いやりのある行動で
災害に強い明石のまちを
みんなで作りましょう！

発達障害のある方
ユウキさん

目の不自由な方
ミエコさん

精神障害のある方
ジロウさん

CONTENTS

登場人物紹介 …… 2p
目の不自由な方の場合 …… 3p
耳の不自由な方の場合 …… 4p
車椅子ユーザーの場合 …… 5p
精神障害・発達障害のある方の場合 …… 6p
ごあいさつ …… 7p

災害の時、障害のある人はどうなってしまうでしょう？
もしも自分が自由に生活できなくなったらどうなるのか考えてみよう。

東日本大震災の時、地域によっては障害のある方の死亡率が
障害のない方の２倍だったというデータがあります。

― 登場人物紹介 ―

目の不自由な方の場合
- 建物や壁などがたおれてきても分からない。
- 道路にヒビが入っているのに気付けない。

目の不自由な方の場合
- 避難所へ行くことが、できなかったり、行った後も移動が大変。

目の不自由な方の場合
- トイレもいつも使ってるのとはちがうから使い方が分からない。

くわしくは
視覚障害

耳の不自由な方の場合 ●目に見えないと危険が分からない。

耳の不自由な方の場合 ●防災無線や警報が鳴っても聞こえない。

耳の不自由な方の場合 ●避難所に行ったとき、手話ができる人がいなければ、いつものようには話せない。

くわしくは

聴覚障害

車椅子ユーザーの場合 ●大きなものがたおれたりして動きづらい。

車椅子ユーザーの場合 ●エレベーターがとまって車椅子で移動できない。

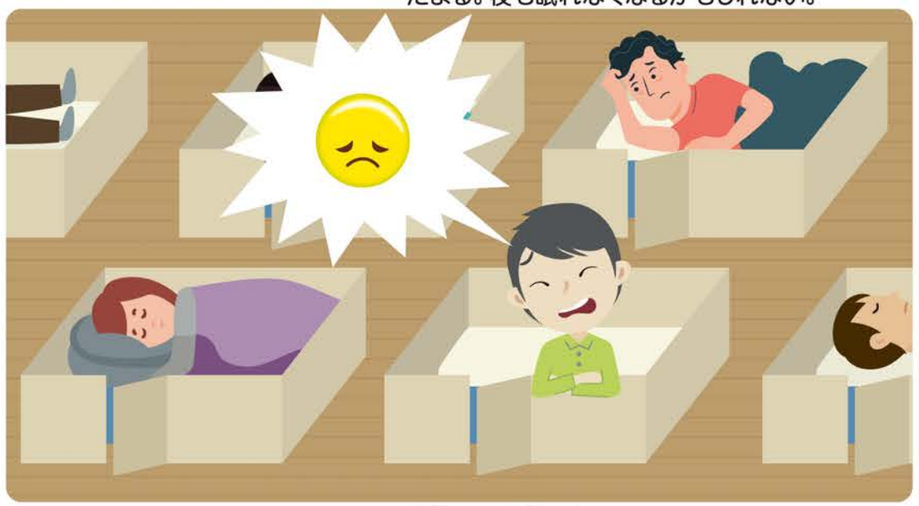
車椅子ユーザーの場合 ●避難所に行ったとき、避難所での移動が大変。

くわしくは

車椅子ユーザー

精神障害のある方の場合 ●病院に通えなくて薬がもらえない。

精神障害のある方の場合 ●避難所に行ったとき、たくさん人がいてストレスがたまる。夜も眠れなくなるかもしれない。



くわしくは

精神障害

発達障害のある方の場合 ●混乱して自分の言いたいことを伝えられなくなるかもしれない。

くわしくは

発達障害

●メッセージ

明石障がい者地域生活ケアネットワーク 副理事長 **飯塚　由美子**

私は、明石障がい者地域生活ケアネットワークの副理事長の飯塚です。

ネットワークの活動の一つに、地域の皆さんに「障害のある人たちのことを理解してほしい」という目的があります。その一つとして、「情報誌ひなたぼっこ」を作っています。

障害者と言っても「視覚障害」「聴覚障害」「知的障害」「精神障害」「身体障害」と様々な障害があります。そして同じ障害であっても個人によって全く生活方法が違います。

日頃の生活でも、不便なことはたくさんありますが、今回はケガをしたり、死んでしまったりと、命に関係する災害時のことを知ってほしいと思いました。

今回の情報誌の内容は『災害時の障害のある方の現状』つまり「困ること」「不自由なこと」「つらいこと」をテーマに作成しました。ぜひ『見て』『理解して』そして『家族や友達に伝えて』『自分にできることはないかな？』と思っていただきたいと、強く願っています。

私が、いつも大切にしていることは「目の前に困っている人がいたら、何かお役に立てることはないかなと考え、行動すること」です。

一人では、恥ずかしかったり、わからなかったり、自信がなかったりするでしょう。でも勇気を出してくださいね。あなたの勇気を待っています！

きょうされん兵庫支部 南相馬支援担当 **松本　多仁子**

あなたの近くに障害のある方はいますか？ 高齢の方はいますか？ 病気でふせっている方はいますか？ 言葉の通じにくい外国の方はいますか？赤ちゃんや小さな子どもはいますか？この人たちは今「災害弱者」と呼ばれる人たちです。

私は、26年前に阪神淡路大震災を経験し、東日本大震災がおこってからこの10年は福島県南相馬市に定期的に支援に、熊本県の大地震のときも震源地益城町の障害のある人の実態調査に入りました。

その中で「災害弱者」と呼ばれる人たちの命がまもれる社会こそが、誰もが安心して暮らせる社会だと確信しました。支援に入る中で聞こえてきた声は、「放射能に色がついていたらいいのに」と帰還困難区域※に入ろうとして止められた知的障害の青年の声、「自閉症の我が子は、不安になると大きな声を出すので避難所には、とてもいられない」と壊れかけ傾いた家で暮らしていたご家族、「道ががたがたで、怖くて一歩も外には出られない」と目の不自由な男性、「避難所には、車いす用トイレがないので水分や食べ物はできるだけ我慢していた」と車いすの女性、「気が付いたときには、もう水やお弁当の配食は終わっていた」と耳の不自由なお母さん、「病院がつぶれて、薬がもらえない」と心の病を持つ人の不安な声。

東日本大震災では、障害のある人の死亡率は、そうでない人の2倍だったという衝撃の事実がありました。命の重さは、みんな一緒です。一日も早く、日本の国から「災害弱者」という言葉が消えることを願っています。

※帰還困難地域：原子力発電所事故の影響で放射線量がきわめて高く、政府が長い間、住民の立入りを制限している地域。